

事例4

< 事例概要 >

- ・ 70 歳代の患者、PS^{※1} 0。死亡時画像診断（Ai） 無、解剖無。
- ・ 主診療科：総合診療科、肝生検施行診療科：外科。
- ・ 抗血小板薬内服中。休薬しなかった。
- ・ 血小板9.5 万/ μ L、PT 時間11.2 秒、PT 活性112.7%、Fib 326 mg/dL。
- ・ 悪性リンパ腫の進行が疑われたため、腹部超音波ガイド下で肝生検が実施された。
- ・ 肝生検終了後、X 線撮影をして帰室した。帰室時に気分不快、血圧低下があった。腹部超音波、造影CT で肝右葉周囲に血腫があり、肝表面の活動性出血と判断され、動脈塞栓術が施行されたが、肝生検終了から約18 時間後に死亡した。
- ・ 生検組織診断の結果は、肝に少量の小型異型リンパ球浸潤がみられたものの、悪性リンパ腫の確定診断には至らなかった。

※1 PS（performance status）：ECOG（Eastern Cooperative Oncology Group）が定めた全身状態の指標で、患者の日常生活の制限の程度を示す（~~P11表1参照~~）